HAMAMATSU
CREATIVE CITY BOOSTER
はままつクリエイティブシティブースター

～ミュージシャン伊澤一葉と音楽～開催レポート

開催日：2025 年 3 月 10 日
@アクトシティ浜松 音楽工房ホール

浜松市が主催するクリエイティブシティブースター事業の一環として、「ミュージシャン伊澤一葉と音楽」の講演会が開催されました。本レポートでは、その内容を振り返りながら、音楽に対する伊澤一葉さんの考えや創作への想いをお伝えします。

■開催概要

本イベントは、浜松市が提供する「はままつクリエイティブシティブースター事業」の一環であり、新たなクリエイターを生み出すことを目的としています。
会場には浜松市内外から多くの音楽ファンが集まり、熱気に包まれる中で開演しました。
伊澤一葉さんは、東京事変や the HIATUS のキーボーディストとして知られ、作曲家・プロデューサーとしても幅広く活躍されています。本講演では、伊澤さんが音楽とどのように向き合ってきたのか、その制作の考え方や体験を語っていただきました。

■伊澤一葉さんの登場

司会を務めたのは、静岡のラジオ局「K-mix」のアナウンサー・鈴木愛実さん。開演前には、観客に向けたアイスブレイクとして、どこから来たのか、浜松の名物を楽しんだかなど、和やかなトークが展開されました。
そして、ついに伊澤一葉さんが登場。大きな拍手とともに入場されました。

■伊澤一葉さんの音楽との出会い

司会者からの質問に対し、伊澤さんは「気づいたらピアノを習っていた」と語ります。母親が音楽大学へ進学する夢を叶えられなかったことから、その思いが自身へ託されたことがきっかけだったそうです。しかし、幼少期のピアノレッスンは厳しく、「レッスンに行く車に乗るのが本当に嫌だった」と当時の心情を明かし、続けることの大変さを語る場面もありました。その一方で、中学時代にギターを始めたことで音楽の楽しさを再発見し、バンド活動を通じて仲間とともに音楽を作る喜びを知ったといいます。

■音楽を仕事にするまで

高校ではバンド活動にのめり込み、進路を考える時期に「バンドで成功するのでは？」という思いから音楽の道へ進むことを決意。母親の影響もあり、音楽大学へ進学します。

大学時代には文化祭などで外部のミュージシャンと交流を持ち、ライブ活動を重ねながら実力を磨いていきました。しかし、卒業後すぐに音楽一本で生計を立てるのは難しく、試行錯誤を繰り返しながら活動を続けたと語ります。

■東京事変との出会い

そんな中、大学の同期であり、当時東京事変のキーボーディストだったヒイズミマサユ機さんの紹介で、椎名林檎さんと出会います。「ライブを観に来てくれたことがきっかけだった」と当時を振り返り、その後、椎名さんから直接連絡を受け、東京事変のメンバーとして参加することになった経緯を話しました。

「いきなり椎名林檎さんから電話がかかってきて驚いた」と語る伊澤さん。講演会参加者にとっても、音楽業界の裏側を知る貴重なエピソードとなりました。

■伊澤さんのピアノ演奏と音楽制作について

講演会中盤では、伊澤さんによるピアノ演奏が行われました。静寂の中、ピアノの音が響き渡ります。

演奏した曲の一つは「白昼夢にふける」です。この楽曲は、日常の中で移ろいゆく光と影のコントラストをテーマに制作されました。繊細な旋律と力強い和音が交錯し、聴く人の心に深い余韻を残します。独特の世界観を持つ演奏に、会場は一瞬で引き込まれました。曲の情感が観客の心を揺さぶり、繊細かつダイナミックな表現が光ります。

演奏後、司会者が感想を述べるとともに、伊澤さんの音楽制作について質問を投げかけました。伊澤さんは、若い頃は感情のままに曲を作っていたものの、現在はより自然に、日常の延長のように作曲していると語ります。「まるで歯を磨くような感覚」と表現しますが、実際には緊張や葛藤もあり、決して無意識に作っているわけではないとのことです。
作曲を始めたきっかけについては、「作曲科という響きがかっこよかったから」と話します。しかし、最初は作曲経験がなく、東京に出てクラシックの理論などを学びながら基礎を固めていきました。とはいえ、理論と自身の感覚が結びつかず苦労した時期もあり、その後バンド活動へと進んでいった経緯を振り返ります。

音楽制作のスタイルは変化しながらも続いており、今では作ることが自然な行為になっていると語ります。司会者が「曲作りのスタイルは変化しながら続いているのですね」とまとめると、伊澤さんも「そうですね」と頷き、音楽が日々の生活の一部であることを改めて述べました。

■ワンポイントレッスン

イベントの終盤に差し掛かり、いよいよ「ワンポイントレッスン」がスタートしました。このコーナーでは、事前に応募した参加者の中から選ばれた 2 名が得意曲を演奏し、伊澤さんから直接アドバイスを受けるという貴重な機会が設けられました。

○1 人目：「砂漠の国の神殿」

1 人目の受講者は、「砂漠の国の神殿」という伊澤さんのオリジナル曲を演奏しました。久しぶりのピアノ演奏ということで、緊張の面持ちでステージに立ちました。

演奏が終わると、伊澤さんが感想を述べました。「自分の曲を演奏してもらうのを生で聴くのは初めてでしたが、とても良かったです。間の取り方が素晴らしく、しっかりと曲の流れを理解していると感じました」。

受講者は、「3 連符の部分が苦手で、指がうまく回らない」と自身の悩みを打ち明けました。これに対し、伊澤さんは「前の音をしっかり聴くことが大事です。フレーズを言葉として捉え、文章を読むように意識してみると、スムーズに弾けるかもしれません」とアドバイスを送りました。

また、受講者からの「伊澤さんが初めて買ったアルバムは何ですか？」という質問に対して、「中学 1 年生の頃に X JAPAN の『BLUE BLOOD』や、光 GENJI の『パラダイス銀河』のレコードを買いましたね」と懐かしそうに答え、会場の笑いを誘いました。

「ピアノを辞めてしまったことがある」と話す受講者に対し、伊澤さんは「僕も先生に怒られて辞めたことがあります」と共感を示しながら、「ぜひこれからも演奏を続けてほしいです」とエールを送りました。

○2 人目：「緑酒」

2 人目の受講者は、浜松市内の小学生。5 歳からピアノを始めた彼女は、東京事変の「緑酒」を披露しました。

演奏後、伊澤さんは「この曲を 11 歳で弾くとはすごいですね！」と驚きを隠せない様子でした。「実は僕もこの曲の伴奏パートしか弾いたことがなくて、メロディーを演奏するのは新鮮でした」と語りながら、当時のレコーディング譜面を見せる場面もありました。伊澤さんから「一緒に弾いてみましょう」という申し入れに受講者は感激し、2 人で短い即興演奏を行いました。独特な世界観に包まれ、音楽の力を肌で感じることができたのではないでしょうか。

最後に受講生が「東京事変の曲をもっと弾いてもいいですか？」と尋ねると、伊澤さんは「ぜひ！また次の機会に連弾しましょう」と笑顔で応じました。

■締めの挨拶

ワンポイントレッスンのコーナーが終わり、イベントは最終章へ。

伊澤さんは「今日のイベントは、自分にとっても新しい挑戦でした。みなさんの演奏を聴きながら、一緒に音楽を楽しむことができて本当に嬉しかったです」と感謝を述べました。

「音楽を続けることは決して楽ではないけれど、続けることで自分の表現が確立されます。

これからも新しいことに挑戦し続けてください。音楽は一生の友達ですから」と参加者に向けて温かいメッセージを送りました。イベント最後には、サイン会なども開かれ、大盛況のうちに幕を閉じました。
この講演会を通じて、参加者の創作意欲が刺激され、新たな音楽の可能性を考える機会となったことでしょう。